

尾張平野における鎌倉・室町時代の煮沸具の編年

北村和宏

はじめに

鎌倉・室町時代に常滑窯・瀬戸窯など全国屈指の窯業地をかかえる尾張地方では、ながらくの間当該期の遺物研究、とりわけ遺跡から多数出土する土器・陶磁器類の研究においては、陶器に研究が集中し、土器（土師器）の研究は低調で、特に編年研究の分野での立ち遅れが目立ってきた。こうしたなか近年になって、野末浩之・佐藤公保・鈴木正貴氏らにより相次いで土師器に関する研究が発表され、土師器皿や15世紀末以降の煮沸具の様相が明らかにされつつある⁽¹⁾。

この小稿は、こうした研究の動向をふまえて、旧尾張国域の遺跡から出土する鎌倉・室町時代の煮沸具を取り上げ、その種類および変遷と画期を総括的に追究し、編年を行なうとともに、派生する二三の問題について若干の考察を加えてみようとするものがある。

なお、対象とする年代については、鎌倉・室町時代とするが、幾分範囲を広くとって所謂「中世陶器」が出現する12世紀初頭以降、瀬戸・美濃窯の大窯期まで（17世紀初頭）とした。また煮沸具の名称について、文章が煩雑になるのをさけるため、「瓦器〇〇」・「陶製〇〇」などと特に断らないかぎり土師器であることを示すものとする。

1 煮沸具の種類と分類

尾張平野の鎌倉・室町時代の遺跡から出土する煮沸具を材質的に見た場合、鉄製品については確実な例がなく、現状では、土器および陶器にかぎられる⁽²⁾。この土器・陶器の煮沸具の種類・器形分類に関しては、すでに佐藤公保・鈴木正貴氏らに

より試案がそれぞれ示されている⁽³⁾。しかしその器種分類、具体的には「鍋」か「釜」かという点をめぐって両者に見解に大きな相違がみられる。重要な問題と考えるが、ここでは、この点について深く立ち入ることを避け、明確な基準をあえて設定することなく慣用的に使用されている区分・呼称をそのまま採用・踏襲することとした。

まず煮沸具を、その推定される系譜および「鏝」の有無など形態の上の特徴から、「鍋」・「釜」および「炮烙」の三種に大別する。とくに現在まで連綿として用いられておりその使用法もほぼ特定できる「炮烙」については、「炮烙鍋」として「鍋」に分類する見方もみられるが、ここでは鍋（食物を煮る器）と炮烙（食品を炒ったり蒸し焼きをしたりするのに用いる）とを分ける立場をとる。

次に、器形の相違にもとづいて、「鍋」を陶製鍋・鍋A（所謂「伊勢型鍋」）・内耳鍋A・内耳鍋Bに、「釜」を陶製羽釜・茶釜型A・茶釜型B・羽釜A・羽釜Bに、「炮烙」を炮烙A・炮烙Bにそれぞれ細分する。このほかに瓦器羽釜・陶製内耳鍋・陶製茶釜型などがみられるが、遺跡からの出土例が現在のところ僅少なため、ここでは検討の対象外とした。

これらの分類私案と佐藤・鈴木両氏の分類案との対応関係を示せば第1表の通りである。

以下、各器形ごとに、その特徴および細分案についてのべるものとする。その際に所謂「法量分化」の問題については、資料の偏り等々解決すべき問題が多く、今回は記述を保留・割愛した。

鍋A（第1図）

所謂「伊勢型鍋」をここでは鍋Aと呼称する。

私 案	鈴木正貴分類	佐藤公保分類	備 考
陶製羽釜	—	—	
陶製鍋	—	—	※鈴木分類は、戦国時代の尾張を対象としたもので、それ以前のものについては対象外となっている。ただ、鍋Aについては伝統的な煮沸具の「甕」とする見解が示されている。
鍋A	(甕)	鍋B	
羽釜A	鍋A類	鍋A	
内耳鍋A	鍋B類	鍋C	
内耳鍋B	鍋B b類第4型式	鍋C	
羽釜B	鍋A類	釜A	※佐藤分類の鍋E・F・Gは鈴木氏の指摘にあるように尾張での出土は極少数であるため、今回は検討の対象から除いた。
茶釜型A	釜A類	釜C	
茶釜型B	釜B類	鍋H	
炮烙A・B	鍋C類	鍋D	

第1表 煮沸具の呼称対照表

この鍋Aについては既に赤塚次郎氏の分析⁽⁴⁾があって、細かな点はともかくその大綱については大幅な変更を要しないと考える。そこでこの鍋Aの細分にあたっては赤塚氏の業績を受け、氏のA類～E類を鍋A1～A5類と呼び替え、あらたな一群として鍋A6類を追加設定した。

鍋A1類：球形の体部に外反する口縁部がつくもので、口縁端部が摘み上げられる。端面は平坦なものが多い。体部外面はタテハケ調整で、内面はナデ調整。この鍋A1類は、概ね灰釉陶器の折戸第53号窯式～東山第72号窯式のものに伴って出土するものから南部系山茶碗第3～4型式に伴うものが知られており、例数が僅少なこともあってなお検討を要す点が多い⁽⁵⁾。灰釉陶器の時期は年代的に小稿の対象外となることもあって、ここでは以下の記述において特にふれないこととする。

鍋A2類：球形の体部に外反する口縁部がつくもので、口縁端部が摘み上げもしくは内側への折り返しにより肥厚する。端面は平坦で水平ないし内傾する。なかには端面が凹むものもみられる。体部外面は、部分的にハケ調整が観察される例もあるが基本的にはナデ調整で、体部下半から底外面にかけてはヘラケズリ調整が施される。

鍋A3類：球形の体部に緩やかに外反する口縁部がつくもので、口縁端部は、短く内側に折り返さ

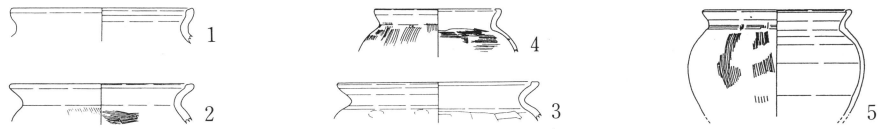
れて肥厚する。端面は幾分丸みを持ち内傾する。体部内外面はナデ調整で、底部内外面はヘラケズリ調整。

鍋A4類：やや扁平な体部に、直立したのち外反する口縁部がつくもので、口縁端部は内側に折り返されて肥厚する。端面は内湾する傾向にある。体部に対する口径の割合が大きく、また明確な頸部を有する点で鍋A1～A3類と大きく異なる。相対的に直立する頸部が短いものを鍋A4a類、長いものを鍋A4b類として分ける。体部内外面はナデ調整で、体部下半から底部にかけてはヘラケズリ調整。鍋A4b類のなかには外面にハケ調整が施されるものもある。

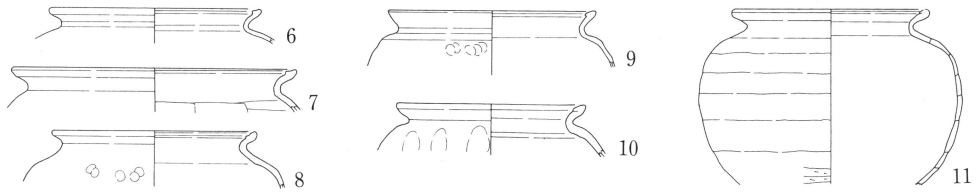
鍋A5類：鍋A1～鍋A4類に比べて器壁が著しく薄い。より扁平な体部から、直立ないし外傾して立ち上がった（頸部）のち外反する口縁部がつくもので、口縁端部は鍋A4類同様に内側に折り返され肥厚するが、折り返し部は幾分薄く幅広となる。端面は内湾する。鍋A4類と比べ頸部と体部との境目が不明瞭（漸移的）である。体部外面はナナメ・ヨコハケ調整で、内面はナデ調整。底部内外面はヘラケズリ調整が施される。

鍋A6類：扁平な体部に、立ち上がった（頸部）のち外反する口縁部がつくもので、鍋A5同様に頸部と体部との境目が不明瞭。口縁端部は短く折

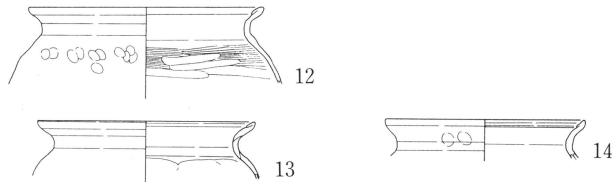
鍋 A1 類



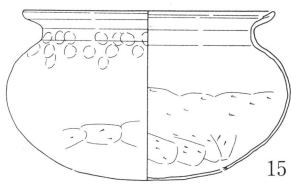
A2 類



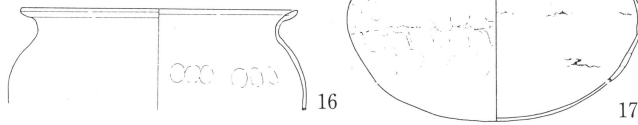
A3 類



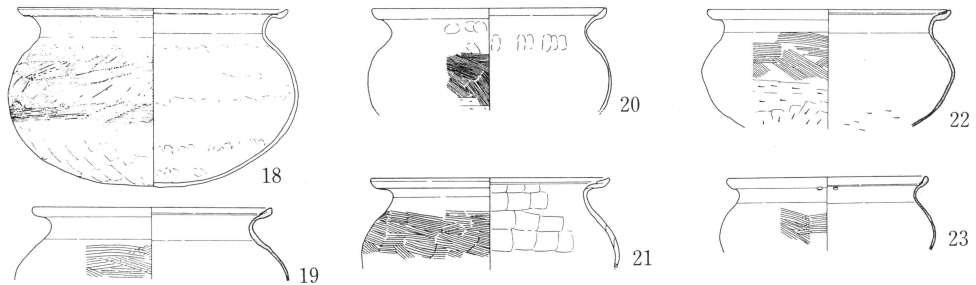
A4a 類



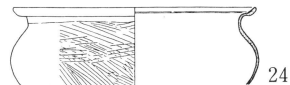
A4b 類



A5 類



A6 類



0 20 cm

第1図 鍋A分類図

朝日西遺跡 (1、2、3、4 : 文1) 国府跡 (5 : 文19) 土田遺跡 (6~9、12 : 文1)
 松河戸遺跡 (10、13、14、15 : 文3) 大淵遺跡 (11 : 文2) 森南遺跡 (16 : 文5)
 鎗場・御林古窯 (17、18 : 文17) 阿弥陀寺遺跡 (19、22、23、24 : 文6) 下津城跡 (20 : 文17)

り返され、端面は幅狭で大きく内湾する。器壁は鍋A5類に比べより堅緻である。体部外面は荒いハケ調整で、その範囲は頸部半ばにおよぶものがある。内面はナデ調整。底部の遺存例は見られないが、おそらくは内外面ともヘラケズリ調整か。なお、この鍋A6類は尾張平野からの出土例が現在のところ極端に少ない。

陶製羽釜（第3図）

この陶製羽釜は、窯跡以外の遺跡からも一定量の出土をみるが、個体間の変異の幅が大きく、現在のところ細分・類別化するに至っていない。ここではその存在を指摘するに留め、その検討は後日の課題としておきたい。なお、現在までの知見では、常滑窯・「中世」猿投窯（鳴海地区・黒笹地区など）・瀬戸窯でこの陶製羽釜が生産されたことが判明している。

陶製鍋（第3図）

現在のところ、遺跡（消費地）での出土例は極めて少ないが、この陶製鍋は、常滑窯などで一定量の生産が確認されており⁽⁶⁾、今後の発掘調査の進展により出土例が増加する可能性が高いものである。ここではその存在を指摘するに留め、いましばらくは出土例の増加を待つこととしたい。

羽釜A（第2図）

腰の張った半球形ないし扁球形の体部で、口縁部直下に齔（羽）がつくもの。この羽釜AをA1～A4の四類に細別するが、形態変化が漸移的であったためか、分類に苦しむものがある。なお齔より上方を口縁部と便宜的に呼ぶことにする。

羽釜A1類：直立ないし内傾する口縁部の直下に、水平方向に突出する齔がつくものである。出土例数が少なく、全形をうかがい得る資料に接していないが、僅かに遺存する体部の形状からみて、体部は腰の張った羽釜A2類に近いものを想定し得る。口縁端部は、内側に短く直角（水平方向）に折り曲げられ、内端が内側に突出する形状となっ

ている。また、口縁内側に、口縁端の造作の際に生じたとみられる強いヨコナデ(?)による凹みがめぐる。体部外面は、ナデないしハケ調整が施される。

羽釜A2類：腰の張った体部に、水平方向に突出する齔と内傾したのち垂直方向に短く立ち上がる口縁部がつくものである。齔の端部径と体部最大径とが殆ど同長といったものが大半を占める。口縁端部の造作は基本的に羽釜A1類と同じであるが、口縁内側をめぐる凹みは幾分浅くなったものが多い。体部外面はハケ調整、内面はナデ調整で平坦・平滑に仕上げられているものが多い。底部内外面はヘラケズリ調整で、なかにはヘラケズリが体部外面中位におよぶものもある。

羽釜A3類：扁球形の体部のもので、口縁部はより内傾化してその断面は体部と一体化した曲線をなす。齔はやや斜め上方に突出し、齔端部の径は体部最大径を下回る。口縁端部の造作は基本的には羽釜A2類と同様であるが、口縁内端の突出は折り曲げられたというよりは、強いヨコナデによって生じたという印象を強くもつ。体部外面はナメ・ヨコハケ調整、内面はナデ調整で平滑に仕上げられている。底部外面はヘラケズリ調整。器壁は羽釜A1～3類にくらべ薄く、緻密な胎土のものが多い。口縁部に吊り下げのための一對の穿孔（焼成前）がみられるものが多々みられる。

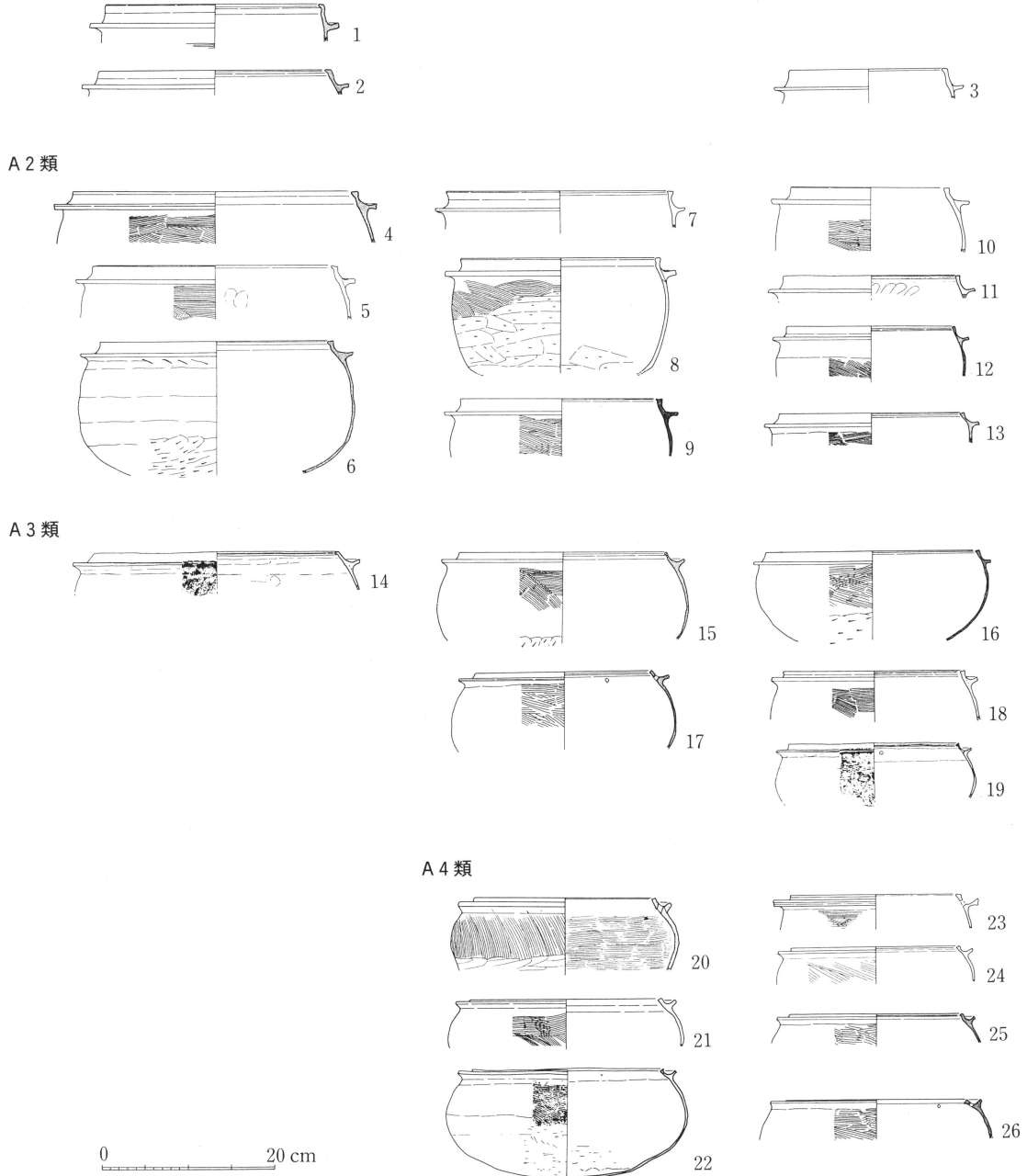
羽釜A4類：浅い扁球形の体部のもので、短く上方に突出した齔がつき、断面が体部と単一曲線をえがく口縁部は、羽釜A3類にくらべより一段と内傾化している。外側から眺めた場合、口縁部はその上端が僅かに齔の上端から突出するにとどまる。なかには口縁上端が、齔上端に隠れてしまうものも散見される。また齔端部の径は、体部最大径を大きく下回る。体部外面はハケ調整、内面はナデ調整のほかハケ調整のものも散見される。底部外面はヘラケズリ調整。器壁は羽釜A3類と同

様に薄く、口縁部には吊り下げのための一対の穿孔（焼成前）がみられるものが殆どである。

内耳鍋（第3図）

半球形の形態で、口縁部内側に吊り手のための「耳（内耳）」が一对つくものである。この内耳鍋は器形の上から大別二種存す。すなわち半球形な羽釜 A1 類

いし鉢形で深手の体部のものと体部が直立し桶形を呈するものである。前者を内耳鍋A、後者を内耳鍋Bと呼び分ける。さらにこれら内耳鍋は、底部に短い突起状の足（殆どは三足）を有するものと無足のものに分けられる。内耳鍋Bについては管見のかぎりではすべてが有足である。これに



第2図 羽釜 A 分類図

阿弥陀寺遺跡（1、2、4、6、7、9、12、13、15～18、25、26：文1） 森南遺跡（3、5、10、11：文5）
 下津城（8：文7） 見晴台遺跡（14、19、22：文18） 堀之内花ノ木遺跡（20、23、24：文10）
 名古屋城三の丸（21：文8）

対して内耳鍋Aには有足のものゝ無足のものゝがあるが、足の有無と器形との間に明確な相関関係を示す形態上の要素を見出し得ないので、ここではあえて内耳鍋Aを足の有無でもって区別することはしない。

内耳鍋Aを主として形態の相違に基づいてA1～A4の四類に細分する。この内耳鍋A1～A3(A4)は鈴木正貴氏の第1型式～第3型式に概ね対応する⁽⁷⁾。

内耳鍋A1類：浅い皿状の底部に、直線的に立ち上がる胴部がつくもので、底部と胴部の境が稜なす。一對の内耳は、口縁端部の内側直下ないし幾分下がった部位に、半球形の粘土板を縦位に平たく取り付け、棒状の工具を貫通させて孔を穿つという造作でつくられる。体部外面は、指オサエ・ナデ調整が施されるが器面には凹凸が目立つ。これに対して内面は、一部にハケ調整が見られるが殆どはナデ調整で、器面は平坦・平滑に仕上げられている。こうした器面の仕上がり状況は以下のA2・A3類においても同様である。なお底部外面はヘラケズリ調整。また口縁部外側で、内耳の貼付位置あたりに浅い沈線を巡らすものがある。

内耳鍋A2類：浅い皿状の底部に、やや内湾する胴部がつくもので、底部と胴部との境に緩い稜がつく。口縁部を仔細にみると口縁部が内傾・内湾するものと短く垂直に立ち上がるものとがみられる。内耳は、細い粘土紐を縦位に貼付し、器壁を外側に押し出しつつ棒状工具を貫通させて孔を整えるという造作がなされている。そのため孔部が凹む分だけ体部外面が丸く突出している。器面調整は内耳鍋A1類と同様である。

内耳鍋A3類：半球形の体部をなし、底部と胴部との境に明確な稜はなく(ヘラケズリ、ナデの調整手法の違いにより稜が生じるものはある)、丸い底部と内湾する胴部とは単一曲線を描いて口縁部にいたる。

内耳鍋A4類：内耳鍋A1～A3にくらべ器壁が幾分厚手。腰が強く張った半球形の体部で、底はいわゆる平丸底様である。内耳の造作・器面調整は基本的に内耳鍋A2・3類と同じであるが、口縁端面の内端を内側に極短く突出させることを意識したとみられる造作のものが散見される。

内耳鍋B：上述のように浅い皿状の底部に、直立気味に立ち上がる胴部がつく桶形の体部の内耳鍋。内耳の造作・器面調整は内耳鍋A2・3類と同様である。細別するにいたっていない。

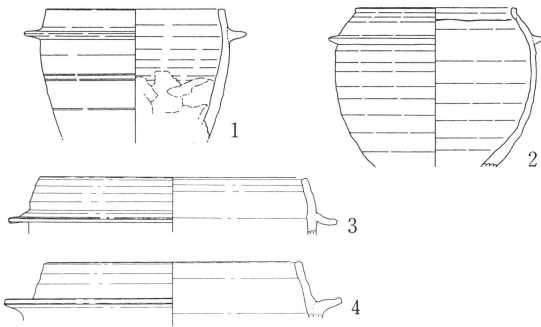
羽釜B(第3図)

丸底の半球形(鉢形)の体部で、口縁部直下に鏝が回る形態のもの。原則として体部外面は指オサエ・ナデ調整。羽釜Aとは、基本的な体部の形状・調整方法・口縁部の造作等々で大きく異なる。この羽釜BをB1～B3の三類に細別する。なお鏝より上方を口縁部と便宜的に呼ぶことにする。

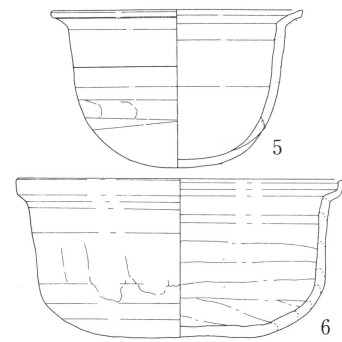
羽釜B1類：全形をうかがい得る資料に接していないが、丸底もしくは平丸底の半球形の体部と考えられる。体部上方が直線的に立ち上がって口縁端部にいたるもので、短く水平に突出する鏝に比べ、口縁部はかなり長いものとなっている。体部と口縁部はほぼ同厚の器壁で、鏝を貼付した際の指オサエにより器面が若干凹むほかは、断面の上では体部と口縁部との区別はない。体部内外面は基本的にはナデ調整であるが、外面に比べ内面は平坦・平滑に仕上げられている。こうした器面の状況は以下の羽釜B2・3類にも共通する。鏝の断面形は、各辺とも内湾(特に上辺・下辺)して稜は鋭角的となっている。

羽釜B2類：半球形の体部に、内湾ぎみに内傾する口縁部がつくもので、羽釜B1類にくらべ口縁部の立ち上がりは低い。口縁部は体部に比べて器壁が厚手となっており、とくに口縁端部がいちばん厚い。鏝の断面形は羽釜B1類と同じであるが全体にやや厚手。体部内外面ともナデ調整である

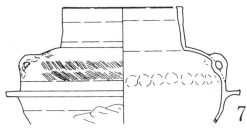
陶製羽釜



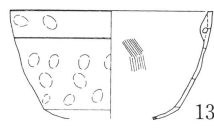
陶製鍋



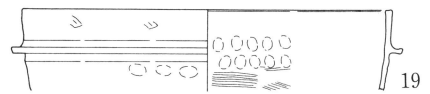
茶釜型 Aa 1 類



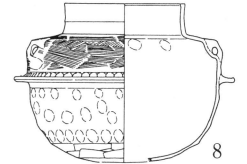
内耳鍋 A 1 類



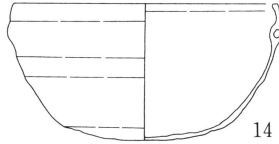
羽釜 B 1 類



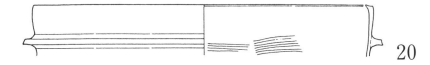
Aa 2 類



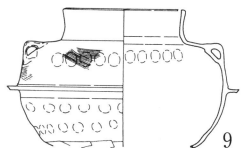
A 2 類



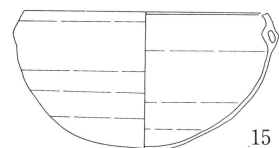
B 2 類



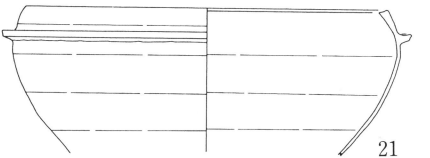
Aa 3 類



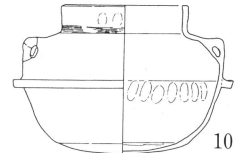
A 3 類



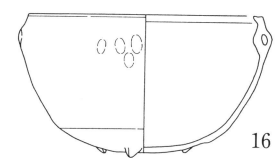
B 3 類



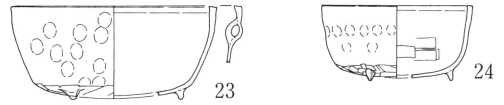
Aa 4 類



A 4 類

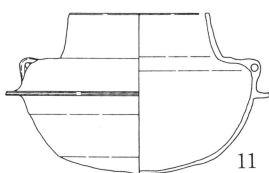


内耳鍋 B

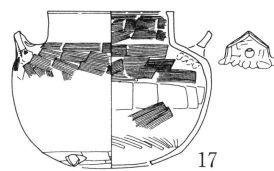


0 20 cm

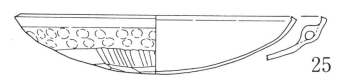
Ab 1 類



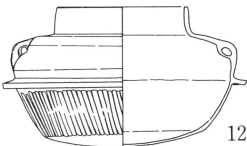
茶釜型 B 1 類



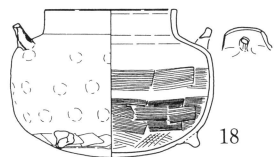
炮烙



Ab 2 類



B 2 類



第 3 図 各器種・器形分類図

H-G-6号B窯 (1:文15) 南山8号窯 (2:文16) 鎗場・御林古窯 (3~6:文17)
 清洲城下町遺跡 (8、13、20:文12 11、12、14、15、21、22:文3 7、9、17、18、23~26:文11)
 朝日西遺跡 (10、16:文14)

が、尖り気味の底部外面はヘラケズリ調整。

羽釜B 3類：半球形の体部に、内湾・内傾する口縁部がつくもので、羽釜B 2類にくらべ口縁部はより低い。羽釜B 2類同様に体部に比べ口縁部が厚手で、なかには鐳の貼りつけ位置より下から厚手となるものも散見される。鐳は突出が短く、厚手で、断面形をみると上辺に対して下辺が短く端面は下向きの斜面となっている。体部内外面ともナデ調整で、底部外面はヘラケズリ調整となっている。

茶釜型（第3図）

鉄製の茶の湯釜（茶釜）を模したとみられる器形で大別二種存す。ひとつは鐳を有するもの（茶釜型A）で、もう一つは鐳の無いもの（茶釜型B）である。この茶釜型A・Bはそのほかの要素においても区別される。すなわち茶釜型Aは原則として無足で、耳は粘土紐を肩部に縦位貼付し造作するのに対して、茶釜型Bはその多くに突起状の足（三足）が付き、耳は板状の粘土を肩部に貼付して、口頸に直交する方向に穿孔している、という相違を見出だすことができる。

茶釜型Aは、鐳がついた扁球形ないし球形の体部に、直立する口縁部がつく器形のもので、肩部には一対の耳がつく。この茶釜型Aはさらに二つに細分される。一つは体部が球形（体部の高さが最大径の2/3ほど）を呈するもの（茶釜型A a）で、もう一群は体部が扁球形（体部の高さが最大径の1/2ほど）で口縁部の口径が大きく全体に平たい印象をもつもの（茶釜型A b）である。これはおそらくは模した鉄製茶湯釜の相違によるものかと想像される。ただ現在のところ、茶釜型A bの出土例は圧倒的に少ない⁽⁸⁾。

茶釜型A aは、口縁部の形状・鐳の貼付位置等々の器形の相違により茶釜型A a 1～A a 4の四類に細分される。

茶釜型A a 1類：口径に対して直立する口縁部が

高いもので、鐳は体部の上位（鉄製茶湯釜では鐳より上位の体部を「甲」、下位の体部を「底」とよぶ。したがってこの場合は、甲高く底高と表現できる）に貼付されたもの。口縁部の器壁が体部より厚手となっているのも特徴のひとつ。鐳の各辺は内湾するが、なかには端面を丸くするものもある。体部外面の上半はハケ・ナデ調整で、下半はヘラケズリ調整。

茶釜型A a 2類：茶釜型A a 1類にくらべ、直立する口縁部の高さが幾分低くなっているが、鐳の位置はA a 1類と同じように体部の上位にある。体部外面の上半はハケ・ナデ調整で、下半はナデおよびヘラケズリ調整で、とくにヘラケズリ調整は底外面に限られるものが殆どである。口縁部の器壁は薄く、体部と同厚となっている。

茶釜型A a 3類：茶釜型A a 2類に比して、直立する口縁部は、口径に対する高さがより低いもので、鐳は、体部のほぼ中央（甲高＝底高）に貼付される。体部外面は、その上半にハケ調整が認められるものが存するほかは、ナデ調整で、底外面のみヘラケズリ調整が施される。

茶釜型A a 4類：茶釜型A a 2～3類に比べ器壁が総じて厚手。口縁部はより低く扁平なものである。鐳は体部中央に貼付されるが、厚手で短く、その断面形は上辺に対して下辺が短く、端面は下に向いた斜面となるものが多い。器面調整はA a 3類に同じ。

茶釜型A bは例数が少なくしかも個体間の形態の差異が大きいため、この一群をひとつの系列として捉えることにやや難があるかも知れない。この点は後日の課題として、ここでは口縁部の大きさ、鐳の貼付位置等々に着目して茶釜型A a 1・A a 2の二類に分け検討を加えることにする。

茶釜型A b 1類：扁球形の体部に、内傾しつつ高く立ち上がる口縁部がつくもので、鐳は体部上位（甲高く底高）に貼付される。口縁部の器壁は体部に

遺跡名 遺構		煮沸具			主な伴出遺物の型式				文献
		鍋 A	陶製羽釜	羽釜 A	南部系山茶椀	北部系山茶椀	瀬戸窯・常滑窯産陶器		
土田	SE07	A 2			第 4 型式				文 1
土田	SK24		○		第 4 型式				文 1
土田	SE12	A 2			第4(～5)型式				文 1
土田	SE11		○		第 4・5 型式				文 1
大淵	SD15	A 2			第 4・5 型式				文 2
土田	SK75	A 3			第 5 型式				文 1
松河戸	SK02	A 3・4 a			第 5・6 型式				文 3
土田	SK37		○		第 6 型式				文 4
森南	SD30	A 4 b			第 7 型式				文 5
阿弥陀寺	SD1015			A 1	第 7 型式	Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ期	常滑窯第6 a・6 b 型式		文 6
松河戸	SK180	A 5			第 7 型式	第Ⅴ期			文 3
森南	SD29			A 2	第4・7・8型式	第Ⅴ期			文 5
下津城	SK12	A 5				第Ⅴ期	常滑窯第6 b 型式ほか		文 7
阿弥陀寺	SD1022	A 5		A 2・3	第 7 型式	第Ⅴ・Ⅵ期			文 6
名古屋城三の丸	SK22			A 4	第 8～9 型式	第Ⅶ期	瀬戸窯後期第Ⅲ段階		文 8
阿弥陀寺	SK1033	A 6				第Ⅶ・Ⅷ期	常滑窯第 9 型式		文 6
舟橋宮裏	SK01			A 4		第Ⅷ・Ⅸ期			文 9
堀之内花ノ木	SD91			A 3・4		第Ⅸ・Ⅹ期			文 10
遺跡名 遺構		茶釜型 A	茶釜型 B	内耳鍋 A	内耳鍋 B	羽釜 B	炮烙 AB	瀬戸・美濃窯産陶器	文献
清洲城下町	NR4001-5層	A a 1		A 1				瀬戸窯後期第Ⅳ段階	文 11
	SD112			A 1				瀬戸窯後期第Ⅳ段階	文 12
	NR4001-3・4層	A a 1		A 2～3		B 1		大窯Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期	文 11
	SD66	A a 1・b 1		A 2・3				大窯Ⅰ期	文 13
朝日西	SD08	A b 2		A 2		B 2・3		大窯Ⅰ・Ⅱ期	文 14
清洲城下町	SD101	A a 2		A 3		B 3		大窯Ⅱ期	文 12
清洲城下町	SK6151	A a 3	B 1・B 2	A 3(・4)	○	B 3	○	大窯Ⅳ期	文 11
清洲城下町	SK7029		B 2		○		○	大窯Ⅴ期	文 11
朝日西	SD177	A a 4	B 2	A 4	○			大窯Ⅴ期～連房式登窯Ⅰ期	文 14

第 2 表 煮沸具とその伴出遺物

体部に対して厚手となっている。体部外面は、底部外面がヘラケズリ調整されるほかはナデ調整を基調とする。

茶釜型 A b 2 類：口縁部が扁平で、鐙が体部中央（甲高＝底高）に貼付されたもの。体部外面は、ヘラケズリ調整される底部外面を除き、ナデ調整。なお、鉄製品を意識してのことか、体部下半に縦位の「ヘラミガキ」風にヘラケズリしたものも稀にみられる。

茶釜型 B は、腰および肩の張った球形の体部と、直立する口縁部からなるがつくもので、肩部に一对の吊り手のための耳がつく。その殆どの底部には、突起状の足（三足）が貼り付けられる。口縁部・耳等々の形状の相違から茶釜型 B 1・B 2 の二類に細分する。

茶釜型 B 1 類：肩の張った体部に、高く直立する口縁部がつくもので、体部に対する口縁部の大きさは茶釜型 A a 3 類に類似する。吊り手のための耳は、穿孔した五角形を基本とする粘土板を肩部に貼付けるもので、孔の向きは口縁部に直交する。この耳は稜がしっかりした造作となっている。体部外面は、ハケ・ナデ調整で、内面はハケ・板ナデ調整のものが多い。底部外面はヘラケズリ調整。こうした器面調整の後に足が貼付される。

茶釜型 B 2 類：基本的形態は、B 1 類と同じであるが、幾分撫で肩で、直立する口縁部が低くなっている点で相違する。体部に対する口縁部の大きさは茶釜型 A a 4 類に類似する。吊り手のための耳の造作も、B 1 類と同じであるが、稜が緩いものが多い。器面調整は B 1 類とこれまた同じであるが、ナデ調整が目立つ。

炮烙（第 3 図）

平丸底の浅い鉢（深皿）形の形態のもので、口縁の内側に吊り手のための「耳」がつく。体部外面は指オサエ・ナデ調整が施されるが、器面には凹凸が目立つ。底外面はヘラケズリ調整。内面は

ナデ調整で、平滑に仕上げられている。器形の上から大別二種に分けられる。一つは、体部が、底部の中心より比較的直線的な単一曲線を描いて口縁端部にたる形態のもので、もうひとつは腰の張った曲線を描く形態のものである。前者を炮烙 A、後者を炮烙 B と呼んで区別する。この炮烙は、小稿では対象外となる江戸時代に盛行するもので、その細分に当たっては、江戸時代のものに合わせて考究する必要があるため、ここではその存在・出現時期を問題するに留めておきたい。

2 煮沸具の編年

以上のように各器形を細別分類したものの相互の先後関係および共存関係について、次に遺構での出土状況を手掛かりとし、全体としてどのように整合性をもった対応関係が見出されるのかについて検討を加え、煮沸具の編年を行ないたいと考える。なおその際、これまでの発掘調査例では、煮沸具の共存関係を直接知り得る事例を欠くものもある。そうした場合には、山茶碗類等々の他器種の陶器を介して推察することとした。

かかる目的で作成したのが、第 2 表である。煮沸具の種類と共伴遺物の型式を示すとともに、遺跡での出土状況に基づいて、各器形の類別相互の先後・共存関係を推定できるように遺構単位に配列した。表の示すところによれば、各器形の類別の先後関係は、その相互の対応関係および山茶碗などの型式との対応関係からみて、概ね次のように推定できる。すなわち、

鍋 A 2 類	➡	A 6 類
羽釜 A 1 類	➡	A 4 類
茶釜型 A a 1 類	➡	A a 4 類
茶釜型 A b 1 類	➡	A b 2 類
茶釜型 B 1 類	➡	B 2 類
内耳鍋 A 1 類	➡	A 4 類
羽釜 B 1 類	➡	B 3 類

鍋A 2類	陶製羽釜			
鍋A 3類	陶製羽釜			
鍋A 4 a類	陶製羽釜			
鍋A 4 b類	羽釜A 1類			
鍋A 5類	羽釜A 2類			
鍋A 5類	羽釜A 3類			
鍋A 6類	羽釜A 4類			
茶釜型A a 1類		内耳鍋A 1類		※羽釜B 1類
茶釜型A a 1類	茶釜型A b 1類	内耳鍋A 2類		羽釜B 2類
茶釜型A a 2類	茶釜型A b 2類	内耳鍋A 3類		羽釜B 3類
茶釜型A a 3類	茶釜型B 1類	内耳鍋A 3類	内耳鍋B類	炮烙A・B 羽釜B 3類
茶釜型A a 4類	茶釜型B 2類	内耳鍋A 4類	内耳鍋B類	炮烙A・B +

第3表 煮沸具とその共存関係表

※ 羽釜B 1類については、現状では、第2表のように内耳鍋A 1類・瀬戸窯後期第IV段階との明確な共伴例はない。したがって出土状況からすれば内耳鍋A 2類との共存を考えるべきであろう。ただ、その直線的な体部の形状が内耳鍋A 1類と一致をみることで、羽釜B 2類に先行する形態と見做されること等を勘案し、内耳鍋A 1類との共存を考える方がより整合的ではないかとの判断に基づき、その位置付けを行っている。

である。

さらに煮沸具相互の共存関係を大胆に推定すると、第3表のように整理される。これより、器形の消長、組合せ等からみてこれらは大きくI～IV期に区分することができる。とともに、先に示した類別相互の先後関係を勘案すれば、例えば第I期では、鍋A 2類と陶製羽釜からなる段階、鍋A 3類と陶製羽釜からなる段階、鍋A 4 a類と陶製羽釜からなる段階の三段階の変遷がうかがわれる、という具合にさらに細かな変遷を追うことができる。同様の観点から、第II期は四段階に、第III期は三段階に、第IV期は二段階に分けられる。

以上の検討をふまえ、段階を「小期」と表記を替えて作成したのが第4図の編年図である。煮沸具全体を第I期～第IV期に分ち、各期をそれぞれ2～4の小期に細別する編年私案である。

以下、記述の都合上、さきに各時期の年代推定を行なったうえで、煮沸具の推移と画期についてまとめることとする。

現在のところ、これらの煮沸具自体に年代を示す年号などの情報が記された資料は皆無である。そこで、これまでの研究で明らかにされている共

伴遺物の年代観を援用せざるを得ないが、そのほかに幸いにも清洲城の遺構について若干年代を推定する手掛かりがみられるので、その点も考慮しつつ、各時期の年代を可能な限り推定してみたい。年代の順序は逆となるが、第IV期第2小期（以下IV-2期と略称する）から検討していくこととする。

IV-2期を代表する煮沸具が出土した朝日西遺跡S D177について、「こうした遺物群の投棄された時期は、溝が機能していた時期とは考え難く、溝の廃絶時、即ち「清洲越」の始まる慶長15年(1610)前後のことと思われる」との調明所見(文14)がある。また共伴遺物には瀬戸・美濃窯の大窯第V期および極少量の連房式登窯第I期のものがあり、連房式登窯は「1606年以前には導入が行なわれていた考えられる」との指摘⁹⁾がある。こうした点をうけ、1610年をIV-2期の年代の1点としておきたい。

IV-1期を代表する煮沸具が出土した清洲城下町遺跡のS K6151は、「天正地震直後に造成された地層の上面から掘削された」もので、「天正地震による噴砂層の上位から掘削されていることから、

1586年以降の絶対年代が付与できる」との調査報告がある。この噴砂層が正しく天正地震によるものかなお検討の余地があるものと考え、いまはこれに従い、上記Ⅳ-2期の年代観を考慮し、ひとまず16世紀末葉をこのⅣ-1期の年代にあて、1600年をⅣ-1・2期の間に設定しておきたい。

Ⅲ-1期には瀬戸窯後期第Ⅳ段階の遺物が共伴し、瀬戸・美濃窯の大窯第Ⅰ期の遺物はⅢ-2期に共伴するようになる。大窯の出現については、16世紀後葉にそれを求めることで大方の一致をみている。こうした見解をうけ、1500年をⅢ-2期の年代の1点としておきたい。

第Ⅰ期・第Ⅱ期については、山茶碗を中心とする共伴遺物の年代観を援用せざるを得ない。ここでは主として藤沢良祐氏の山茶碗編年等との対応から年代を求めた⁽¹⁰⁾。

以上、推定される年代については、第4図左端に示した。

最後に、煮沸具の推移と画期についてまとめるとともに派生する若干の問題について関説してみたい。

第Ⅰ期 (12世紀中葉～13世紀中葉)

鍋Aおよび陶製羽釜からなる時期で、鍋Aの型式変化にもとづき三つの小期に分けられる。資料的制約もあって12世紀前葉の様相については鍋A1類が組成するであろうという点を除いて定かではない。この鍋Aについていえば、第3小期に体部の扁球形化(下からの加熱に有効な器形の確立)という形態上の画期が認められることに留意しておきたい。また、既述のようにこの時期には陶製鍋の存在が常滑窯で知られており、今後の遺跡調査の進展で陶製鍋を組成に加えることとなるかも知れない。

第Ⅱ期 (13世紀後葉～15世紀中葉)

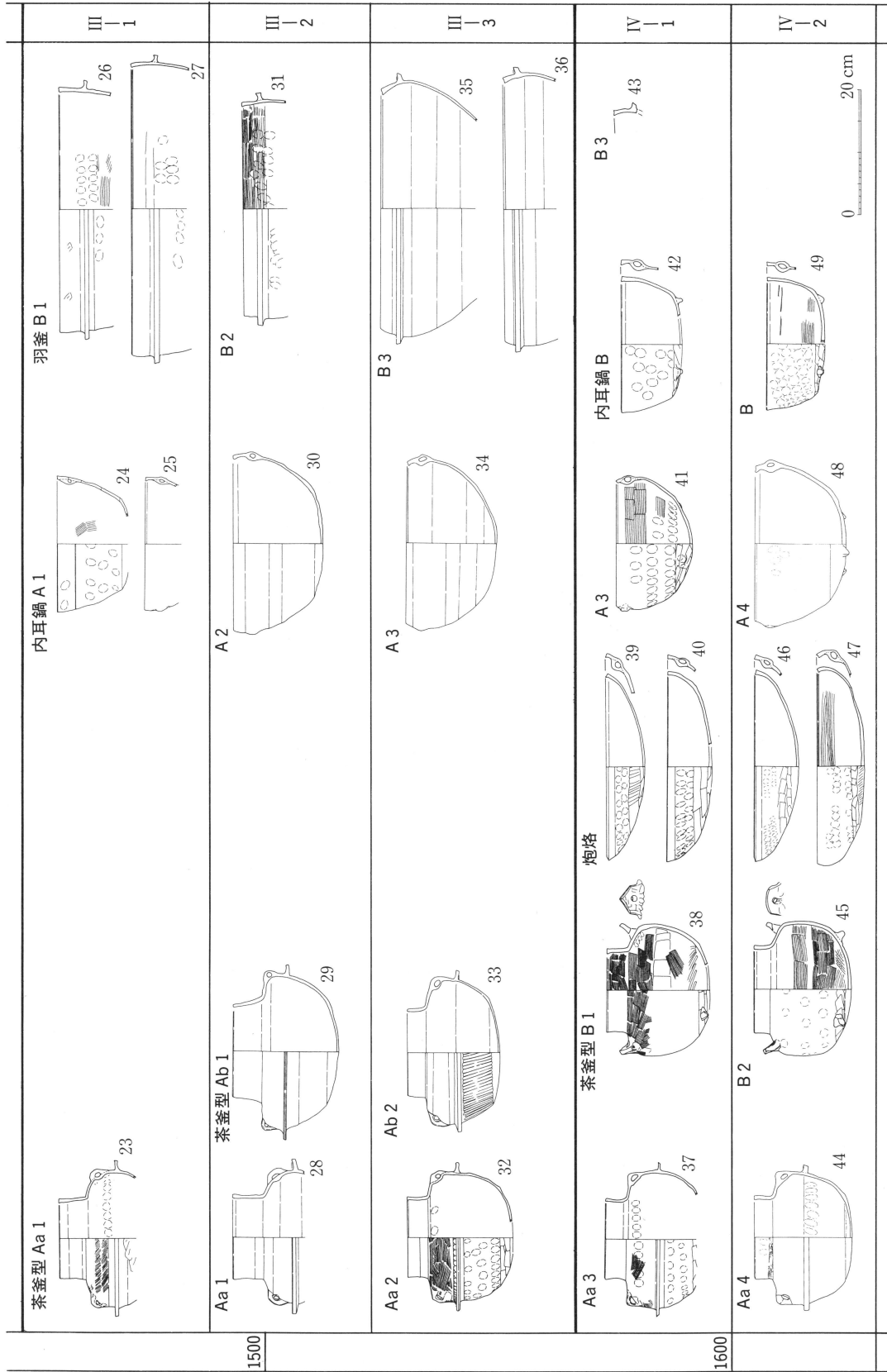
鍋Aは形態の変化をしつとも存続・盛行するが、陶製羽釜が姿を消し、かわって羽釜Aが出現・盛

行する。とくに、Ⅱ-3・4期に、器形を越えて鍋A5・6類および羽釜A3・4類に吊り手を装着するための一対の穿孔が認められるという点は注目に値する。尾張地方ではこれまでの煮沸具で、「把手」のつくものはあっても、吊り手(弦掛)を有するものは確認されていないからである。ただ、留意しておきたいのは、焼成後の穿孔のみならず、焼成前の穿孔も多く確認されているが、この段階では基本的には既存の器形のものに穿孔して吊り手を装着したにすぎないという点である。本格的に吊り手装着のための部位をもつ煮沸具の出現はⅢ-1期の内耳鍋・茶釜型の出現からである。鍋Aおよび羽釜Aの型式変化の組合せにより四つの小期に分けられるが、第4小期について、鍋A6類の出土例が僅少な点を勘案すると、鍋Aがこの時期に組成から基本的に姿を消している可能性がある。今後の資料の蓄積のなかであるいはこの第Ⅱ期第4小期を、鍋Aが殆んど欠落し羽釜Aが組成の中心なる時期として独立させる必要が生じるかもしれない。あわせて、第1小期についても、羽釜A1類の出土例がきわめて少なくこれまた問題がある。今後の検討課題としておきたい。

第Ⅲ期 (15世紀後葉～16世紀中葉)

これまでの鍋A・羽釜Aが一斉に姿を消し、茶釜型A・内耳鍋A・羽釜Bがこれにとって変わり煮沸具の様相が一変する。鈴木正貴氏が強調した「尾張型煮炊具群の出現」である⁽¹¹⁾。これら新出のものは、従来の器形の急進的な型式変化で生まれたとは到底考えられないものである。実証の面で一部憶測の域を出ないきらいもあるが、佐藤公保氏らの指摘にあるように鉄製煮沸具の模倣によるものとみておきたい⁽¹²⁾。こうした意味で、第Ⅲ期初めのこの画期は、一部の器形の交代・新器形の組成への参入といった第Ⅱ期初め・第Ⅳ期初めの画期とは、あきらかに質的にことなるものであり、鎌倉・室町時代を通じて最大のとして画期と

	鍋 A 2	陶製羽釜	I - 1
1200	A 3		I - 2
A 4 a	A 4 a		I - 3
A 4 b	羽釜 A 1		II - 1
1300	A 5		II - 2
A 5	A 3		II - 3
1400	A 6		II - 4



第 4 図 煮沸具編年図 (掲載遺物の出土遺跡・遺構は169頁)

して位置付けられる。ただ肝腎の何故にこの時期こうした画期が生じたのかということについては詳らかにし得ない。暦年代の推定に大きな誤りがないとすれば、この大画期は、15世紀後葉に起こったこととなる。つまり、かの応仁の乱の終末と相前後した時期にあたることとなり、そのかわり想起されるが、これまた憶測の域をでない。この第Ⅳ期は、茶釜型A・内耳鍋A・羽釜Bの型式変化の組合せにより三つの小期に分けられる。

第Ⅳ期（16世紀後葉～17世紀初頭）

これまでの器形が存続するとともに、新たに茶釜型B・内耳鍋B・炮烙A・Bが組成に加わる。特に炮烙は後の江戸時代を通して盛行していくもので、その出現は所謂「近世的煮沸具の出現」として評価し得るものである。また先に述べたように炮烙の用途を「食品を炒ったり蒸焼きしたりするのに用いる」ものとする立場からすればその出現は、(1)この時期に食品を炒ったり蒸焼きしたりする調理法が定着し盛行した、(2)調理法そのものは従来より存したがこの時期に専用の器形が確立した等々、調理法の問題にも関わることとなる。いまここで(1)か(2)なのか結論は出せないが、今後使用痕の検討などを通して解明すべき重要問題である。各器形の型式変化の組合せにより二つの小期に分けられる。

おわりに

以上、小稿では、尾張平野における鎌倉・室町時代の煮沸具の変遷について、その間に三つの画期を認め、全体を4期13小期に編年してみた。編年の作成過程に多くを費やし、こうした煮沸具の推移と画期が意味するものは何か、生産と流通の問題、周辺地域との対比および尾張の特質に関する問題、そして何よりも「どのような火処でどのように使用したのか」・「何を煮炊きしたのか」という基本的な問題等々、その歴史的評価に関わ

る点について殆どふれることはできなかった。後日あらためて関説する機会を得たいと思う。

小稿をまとめるにあたり下記の方々より、御指導・御教示を頂いた。記して謝意を表したい。

加納俊介 松田 訓 木村有作 佐藤公保
鈴木正貴 尾野善裕

註

- 1) 煮沸具に関する主な研究として下記の文献があげられる。
野末浩之1988「愛知県における11～13世紀の煮沸形態」(愛知県陶磁資料館研究紀要7)愛知県陶磁資料館
佐藤公保1988「尾張の土師器煮沸具—15～17世紀を中心に—」(マージナル No.9)愛知考古学談話会
鈴木正貴1994「戦国時代における尾張型煮炊具の歴史的様相」(考古学フォーラム4)考古学フォーラム
鈴木正貴1995「第Ⅸ章第1節清洲城下町の遺物様相」『清洲城下町遺跡Ⅴ』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第54集 勸愛知県埋蔵文化財センター)
- 2) 管見の限りでは、唯一、「12世紀後半」とみられる鉄製羽釜が大毛沖遺跡(愛知県一宮市)の「旧河道」から出土している。鉄製品については、いましばらく発掘調査の進展をまちたい。
永井宏幸ほか「大毛沖遺跡」『年報 平成6年度』(勸愛知県埋蔵文化財センター)
- 3) 前掲註1)の佐藤公保1988、鈴木正貴1994・1995
- 4) 赤塚次郎1987「第Ⅸ章考察 1土師器 1)鍋」文1
赤塚次郎1994「Ⅲ-4-1土師器系 鍋」文3
- 5) 折戸第53号窯式～東山第72号窯式のものに伴った例としては、尾張国府跡S K131出土品(稲沢市教育委員会1883『尾張国府跡発掘調査報告書Ⅴ』稲沢市文化財調査報告Ⅷ)や朝日西遺跡S E52(文14)があげられる。南部系山茶碗第3～4型式に伴った例としては朝日西遺跡S K492出土品(文14)があげられる。
- 6) たとえば、中野晴久1994「赤羽・中野「生産地における編年について」」(全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集)日本福祉大学知多半島総合研究所
- 7) 前掲註1)の鈴木正貴1995
- 8) このほかにもこれらに分類し得ない個性豊かな個体がある。今後の検討を要す。
- 9) 伊藤嘉章1988「瀬戸・美濃における大窯生産」(研究紀要2)岐阜市歴史資料館

- 10) 基本的には下記の文献の編年観にもとづく。
 藤沢良祐1982「瀬戸古窯址群Ⅰ」(瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ) 瀬戸市歴史民俗資料館
 藤沢良祐1986「瀬戸大窯発掘調査報告」(瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅹ) 瀬戸市歴史民俗資料館
 藤沢良祐1990「付編1 瀬戸地方の北部系山茶碗窯」『尾呂』瀬戸市教育委員会
 藤沢良祐1991「瀬戸古窯址群Ⅱ」(瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅹ) 瀬戸市歴史民俗資料館
 中野晴久1994「赤羽・中野「生産地における編年について」(全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集) 日本福祉大学知多半島総合研究所
- 11) 前掲註1) 鈴木正貴1994
 12) 前掲註1) 佐藤公保1988

文献

- 文1 赤塚次郎編『土田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第2集 1987 愛知県埋蔵文化財センター
 文2 宮腰健司編『大淵遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第18集 1991 愛知県埋蔵文化財センター
 文3 赤塚次郎編『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集 1994 愛知県埋蔵文化財センター
 文4 城ヶ谷和広編『土田遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第23集 1991 愛知県埋蔵文化財センター
 文5 加藤安信ほか編『森南遺跡』甚目寺町文化財調査報告Ⅱ 1990 愛知県海部郡甚目寺町教育委員会
 文6 石黒立人編『阿弥陀寺遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第11集 1990 愛知県埋蔵文化財センター
 文7 日野幸治編『下津城跡発掘調査報告書(Ⅲ)』稲沢市文化財調査報告ⅩⅩⅨ 1987 愛知県稲沢市教育委員会
 文8 尾野善祐編『名古屋城三の丸遺跡第6・7次発掘調査報告書』1995 名古屋市教育委員会
 文9 赤塚次郎ほか編『跡ノ口遺跡 一色長畑遺跡 船橋宮裏遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第51集 1994 愛知県埋蔵文化財センター
 文10 蟹江吉弘編『堀之内花ノ木遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第52集 1994 愛知県埋蔵文化財センター

- 文11 鈴木正貴編『清洲城下町遺跡Ⅳ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第53集 1994 愛知県埋蔵文化財センター
 文12 鈴木正貴編『清洲城下町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第17集 1990 愛知県埋蔵文化財センター
 文13 小澤一弘編『清洲城下町遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第27集 1992 愛知県埋蔵文化財センター
 文14 小澤一弘編『朝日西遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第28集 1992 愛知県埋蔵文化財センター
 文15 野口泰子編『埋蔵文化財調査報告書』名古屋市文化財調査報告25 1993 名古屋市教育委員会
 文16 野末浩之編『南山8号・9-A~D号窯発掘調査報告』1991 愛知県陶磁資料館
 文17 中野晴久ほか編『鎗場・御林古窯址群』常滑市文化財調査報告第15集 1985 愛知県常滑市教育委員会
 文18 岡本俊朗編『見晴遺跡台第12・13次発掘調査の記録』1978 名古屋市教育委員会ほか
 文19 北條献示編『尾張国府跡発掘調査報告書(V)』稲沢市文化財調査報告ⅩⅧ 1983 愛知県稲沢市教育委員会

第4図 煮沸具編年図 掲載遺物の出土遺跡・遺構一覧

- I-1: 土田 S E07 (1) S E12 (2) S K24 (3・4)
 文1 I-2: 土田 S K75 (5) S E11 (7) 文1
 松河戸 S X155 (16) 文3 I-3: 松河戸 S K02 (8)
 文3 土田 S K37 (9) 文4 II-1: 森南 S D30 (10)
 文5 阿弥陀寺 S D1015 (11) 文6 II-2: 下津城 S K12 (12)・包含層 (14) 文7 阿弥陀寺 S D1022 (13) S D1052 (15) 文6 II-3: 阿弥陀寺 S D1022 (16, 17) S D102 (18) 文6 II-4: 阿弥陀寺 S K1003 (19) 名古屋城三の丸 S K22 (20) 文8 堀之内花ノ木 S D91 (21)
 文10 見晴台 包含層 (22) 文18 III-1: 清洲城下町 N R4001 (23, 26, 27) 文11 S D112 (24, 25) 文12 III-2: 清洲城下町 S D66 (28~29) 文13 N R4001 (31)
 文11 III-3: 清洲城下町 S D101(32) 文12 S D08(33~36) 文13 IV-1: 清洲城下町 S K6151 (37~43) 文11 IV-2: 清洲城下町 S K7029 (45~47, 49) 文11 朝日西 S D177 (44, 48) 文14